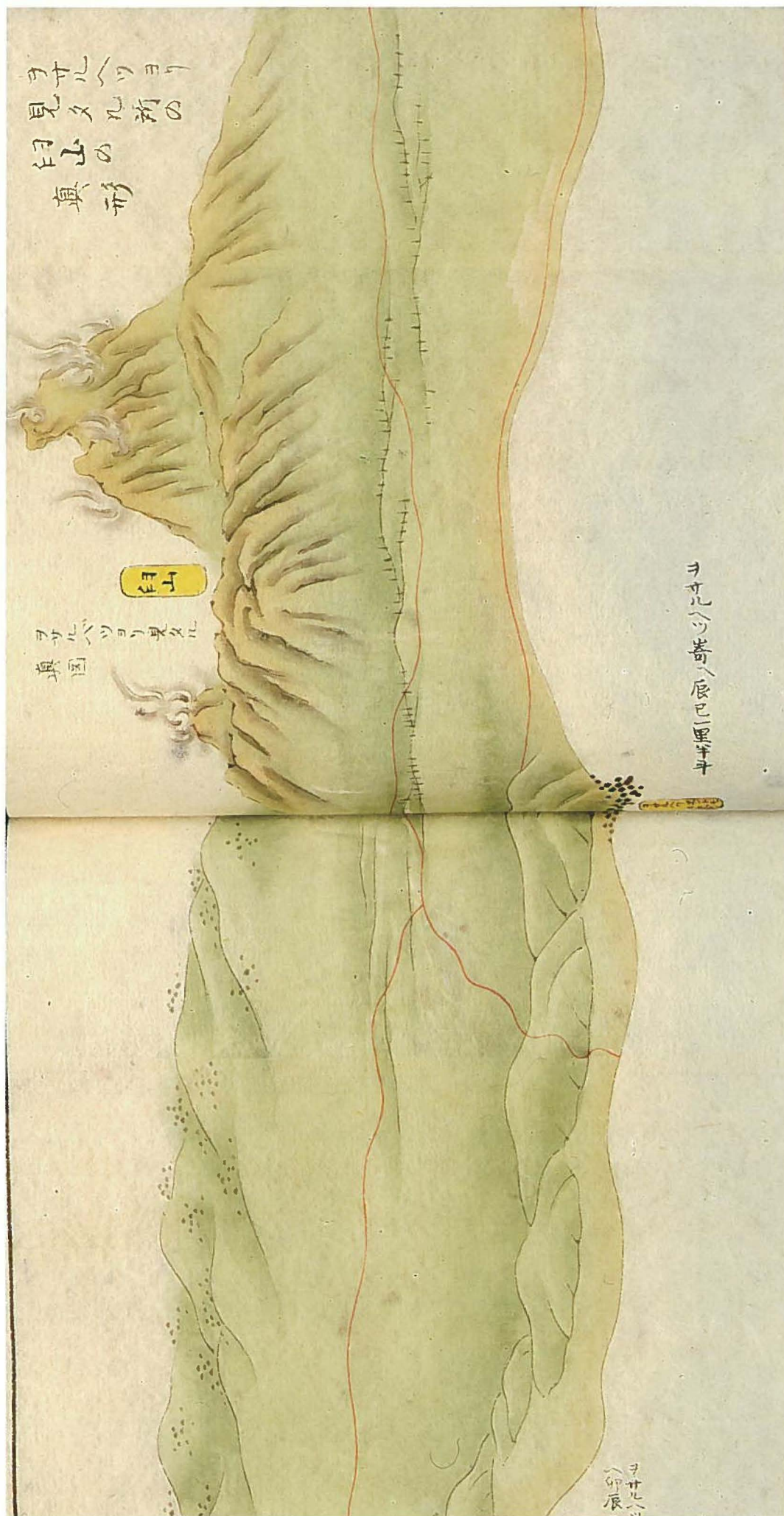




「東蝦夷地海岸図台帳」より（函館市中央図書館蔵）

噴火と新山誕生を繰り返す有珠山

1663年の大噴火（噴火規模指数VEI=5）以来、有珠山は少なくとも9回の噴火を繰り返している。20世紀の4回の噴火でも、溶岩ドームや潜在ドームの「新山」を押し上げ、人々の目の前に誕生させ続けている。

1822年の火砕流噴火

17～19世紀の有珠山噴火へ目を転ずると、深刻な災害の歴史に思い至る。1822年噴火（VEI=4）では、虻田海岸のコタン（集落）が激しい火砕サージに襲われ、103名が犠牲になった（注：「大白山焼崩日記」発見で犠牲者数改訂、川鱈2007）。

有珠善光寺の古文書によると、前兆地震は6日間続き、1769年の火砕流噴火（VEI=4）の経験もあり、噴火に際し住民は一旦避難したが、山を越えたと即断し戻ると、火砕流噴火に遭遇した。

1853年噴火と大有珠ドームの誕生

前頁の絵は、長沢盛至が「東蝦夷地海岸図台帳」に描いた1855年の有珠山のスケッチであるが、1853年噴火（VEI=4）による地形変化が詳しく描かれている。谷元旦による1799年の有珠山の古絵図（日本名山図会）には、ほぼ同じ高さの南外輪山が連なり、その西部で小有珠ドームが僅かに頭を出していた様子が描かれている。南外輪山や西山、手前の流れ山地形などが、極めて丁寧に描かれており、1799年当時、大有珠やその屋根山が見えなかったことは確実であろう。

だが、長沢の1855年のスケッチでは、山頂に初めて大きなドームが描かれ、その数か所で強い噴気活動がみられる。大有珠ドームの誕生である。

なお、長沢の絵図や記述から、大有珠ドームは1853年の噴火で誕生したと考えられているが、これには火山学者の田中館秀三による「それ以前から隆起が続いていたはず」との異論もある。

赤く光り輝く溶岩ドームが山頂に湧き出した

1853年の噴火でも再び火砕流が発生したが、幸い、被災域に住民はほとんどいなかったし、住民避難も行われていたため、犠牲者はなかった。

当時の様子を長沢はこう記述している。「元の山の形はただ白のごとし。嘉永6年（1853年）3月5日（旧

暦）より昼夜となく鳴り渡り、15日昼頃ひとしお激しく震動、地軸も裂け、この山今にも微塵になるやと覚えて、麓に住む者一時に馳せ逃げ。28日まで、かくの如く振動止まざるうちに、突然と秀でたる大峰湧き殖えたる。一面白煙立ち上りて、山辺赤く。最も殖えたる初めの頃、ただ一面に赤く光りて、今より見事なりしとぞ」。（以上は、三松1962より転載）

1945年に東山麓で誕生した昭和新山の溶岩塔も、誕生直後はやはり赤く光り輝き、その美しさに観光船がでたほどという。自然の火はいつも人々を魅惑するものだ。

大有珠の屋根山も誕生

長沢のスケッチでは、大有珠の南東側に伸びる第二屋根山の隆起が、独立した隆起地形として、はっきり描かれている。この屋根山の地形はなだらかで、侵食が少ない。活動末期に厚い火山灰に覆われ、まだ2年後は侵食が進んでいなかったようだ。成石修が「東徼私筆」（函館図書館蔵）に描いた、室蘭から望む1857年の「白山」でも、この屋根山が見事に描かれている。屋根山は大有珠ドームと同時期に誕生した潜在ドームなのだ。

有珠山のドーム配列構造

有珠山の十数個のドーム群の分布には、規則性がある。ほぼ北西・南東方向の主系列と、その北側に平行に走る副系列の帯状分布である。現在のハザードマップも、この考えに依拠している。南東端の標高の低い潜在ドーム（第一屋根山）と、標高の高い潜在ドーム（第二屋根山）、そして大有珠ドーム本体の順番で隆起したのが、1853年の新山生成の全体像であろう。

変動する大地のジオパーク

現在、洞爺湖有珠山地域は、日本で最初の世界ジオパークで、メインテーマは「変動する大地との共生」である。しかし、変動を実感することは意外にも難しい。古来の豊富なデータを手に現場を歩き、世界一の変動の地で、まだ解ききらぬ火山活動の秘密に思いをめぐらせることは、ジオパーク探訪の真髄そのものだ。

岡田 弘（NPO法人環境防災総合政策研究機構 理事／北海道大学 名誉教授）